

スタートカリキュラムとしての生活科教育の充実のための課題

—2017 年改訂学習指導要領の検討を通して—

Problems for the enhancement of life and science education as a start curriculum;
Through critical review of the revised course of study in 2017

岩野 清美
IWANO Kiyomi
(和歌山大学教育学部)

西端 幸信
NISHIBATA Yukinobu
(和歌山大学教育学部非常勤講師)

受理日 平成 30 年 1 月 27 日

抄録：2017 年に発表された小学校新学習指導要領で生活科は、幼児教育での学びを小学校教育につなぐ、スタートカリキュラムの中心となることが求められた。幼児教育と比較した小学校教育の特質は「自覚的な学び」であるとされる。本稿では、指導要領を批判的に検討しその課題を明らかにしたうえで、現行の生活科教科書における問いに着目し、生活科がスタートカリキュラムとしてその役割を果たすために検討すべき課題について、①問いの質、②学習活動の見通し、③学習活動の選択の 3 点から明らかにした。

キーワード：生活科、スタートカリキュラム、自覚的な学び

1. はじめに

2017 年 3 月（解説は 6 月）に新学習指導要領が発表された。生活科にとっては、1989 年の教科発足以来、1998 年、2008 年に続く 3 回目の改訂となる。今回の改訂では、生活科は幼児教育での学びを小学校教育につなぐ、スタートカリキュラムの中心となることが求められた。

スタートカリキュラムとはどのようなものか。『小学校学習指導要領解説 総則編』には、以下のように記されている。

低学年における学びの特質を踏まえて、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育むことを目的としている生活科と各教科等の関連を図るなど、低学年における教育課程全体を見渡して、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるように工夫する必要がある。特に、小学校の入学当初においては、幼児期の遊びを通じた総合的な指導を通じて育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、スタートカリキュラムを児童や学校、地域の実情を踏まえて編成し、その中で、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の編成など、指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められる。

(文部科学省『小学校学習指導要領解説総則編』、2017 年、p.73。
下線部引用者)

幼児教育での学びを小学校教育での学習に円滑に接続することを目的としたスタートカリキュラムにおいて、生活科を中心としたカリキュラム編成や指導計画上の工夫が求められているといえよう。

本稿では、このスタートカリキュラムを生活が果たすべき重要な役割と捉え、以下の 2 点を検討する。

(1) 学習指導要領の分析

- ・スタートカリキュラムの内容である「安心」、「成長」、「自立」
- ・スタートカリキュラムの目的である、小学校での学びへの接続

(2) 教科書の分析

- ・教科書に示された「問い」の分析を通して、今日生活科に求められている役割を十分に果たすために検討すべき課題を明らかにする。

2. スタートカリキュラムの内容と生活科

それでは、スタートカリキュラムの内容はどのようなもので、また、接続すべき小学校教育での学びの特質はどのような点にあるのだろうか。文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センターによる『スタートカリキュラムスタートブック』では、スタートカリキュラムの内容を「安心」、「成長」、「自立」とす

るとともに、小学校教育の学びを「自覚的な学び」とし、幼児教育と比較したその特徴について以下の3点を指摘している。

- ・ 学ぶことについての意識があり、(中略：引用者) 自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいく。
- ・ 各教科等の学習内容について授業を通して学んでいく。
- ・ 主に授業の中で、話したり聞いたり、読んだり書いたり、一緒に活動したりすることで他者と関わり合う。

(文部科学省 国立教育政策研究所『スタートカリキュラムスタートブック』、2015年)

このような特徴をもつ小学校教育への円滑な接続を目的とするスタートカリキュラムだが、成田らによれば、その内容、構成は、大きく次の3つでとらえることができる¹⁾。

- ① 安心感をもち、新しい人間関係を築いていくことをねらいとした学習
- ② 生活科を中心とした合科的・関連的な学習
- ③ 教科等を中心とした学習

これらの構成についてだが、同じく成田らは、木村吉彦・仙台市教育委員会によってまとめられた論考を参照しながら、子どもたちは、物理的環境への適応、対人的環境への適応、社会文化的適応への順を追って新しい環境に適応していくことを述べている²⁾。子どもの新しい環境への適応がこのような順序で進んでいくものであり、また、カリキュラムもその方向に沿って構成されていくものであるならば、4月の入学当初に生活科で設定される「学校探検」は一義的には子どもたちの物理的環境への適応をめざしたものであり、そのなかで、学校のなかの多くの人と出会ったり、見てきたことを発表するなどの活動を通して、対人的・社会文化的な適応をも図っていく、スタートカリキュラムの中核となり得るものと言えるだろう。

さて、新学習指導要領において、スタートカリキュラムの内容である「安心」、「成長」、「自立」の3つに関わるキーワードとして指摘されるのは、「活動」、「関わる(関わり)」である。例えば、『小学校学習指導要領解説 生活編』(以下、単に『解説』というときには、2017年度『小学校学習指導要領解説 生活編』をさす)には以下のような記述がある。

第1学年の児童にとっては、スタートカリキュラムにおいて、幼児期の生活に近い活動があったり、分かりやすく学びやすい環境の工夫がされていたり、人と関わる楽しい活動が位置付けられていたりすることが安心につながる。また、安心して生活することで自分の力を発揮できるようになり、友達や先生に認められる経験を重ねて更なる成長への意欲が高まる。そして、自分で考え、判断し行動するという学びのプロセスを歩んでいくことで、学習者として自立していくことができる。

(「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 1 指導計画作成上の配慮事項」文部科学省『解説』、pp.61-62。下線部は引用者による)

ここで述べられているのは、生活科を中心としたスタートカリキュラムでの学びの中心が「活動」であり、そこで、人と「関わる」などの楽しさが「安心」につながる。そのなかで「成長」への意欲と学びのプロセスの経験の積み重ねによる「自立」が期待できる、ということであろう。「関わる」「活動」を中心に設計するというのが、生活科における基本的なスタートカリキュラムの考え方である。

3. 小学校での学びの接続と社会科

前章では、身近な「ひと・もの・こと」と関わる活動を中心とした生活科の学びが、児童の安心・成長・自立を目的とした小学校教育のスタートカリキュラムにおいて重要な役割を果たしうることを示した。しかし、これだけでは、幼児教育との接続だけであり、小学校教育への接続としては不十分である。

「1 はじめに」で示したように、小学校教育の特徴は、「自覚的な学び」にあるとされている。それでは、生活科における「自覚的な学び」とはどのようなものと考えられているのだろうか。

『解説』の「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い

1 指導計画作成上の配慮事項」には、以下のように記されている。

- (4) 他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

より自覚的な学びに向かうとは、学ぶということについての意識があり、集中する時間とそうでない時間の区別が付き、自分の課題の解決に向けて、計画的に学んでいくことである。

(「第4章 指導計画の作成と内容の取扱い 1 指導計画作成上の配慮事項」文部科学省『解説』、p.55、p.59。下線部は引用者による)

ここでは、「自覚的な学び」の要件として、以下の4つが挙げられている。

- (1) 学ぶということへの意識
- (2) 集中する時間とそうでない時間の区別
- (3) 自分の課題の設定
- (4) 課題解決への計画的な学び

以下では、上記4つの要件について、それぞれ新学習指導要領解説でどのように述べられているかを見ていく。

(1) 学ぶということへの意識

『解説』において「意識」という語の多くは、例えば「カリキュラム・マネジメントを意識した指導計画の作成」といった「教師側の視点」という意味合いで使われている。「児童の意識」という意味でも、「活動における自己関与意識」、「相手意識」、「帰属意識」、「公共の意識」、「身近な人々、社会及び自然などの対象を、自分と切り離すのではなく、自分とどのような関係があるのかを意識しながら、対象のもつ特徴や価値を見いだす」など、非常に多様な意味合いで使われている。これらの中には、例えば「自分自身と対象との結び付きに意識を向け、自分と対象との関わりが具体的に見えてくる」（『解説』、p.19）とあるように、生活科における「身近な生活に関する見方・考え方」の内実を説明しているものもある。しかし、直接的に児童の「学習への意識」について言及している箇所は、一箇所しかない。少し長くなるが、引用してみよう。

生活科においては、まず、複数の内容で一つの単元を構成することが考えられる。それは、児童の発達の段階や学習への意識を重視して単元を構成するからであり、学校や地域の特性を生かすからである。

例えば、内容(3)地域と生活の単元を構想する場合、内容(4)公共物や公共施設の利用と関連付けて単元を構成することが考えられる。それは、学校の周辺の地域を探検する中で、図書館や博物館などの公共施設を見付け、公共施設の利用に関する活動に必然的に発展することが容易に想定できるとともに、そのことが児童の意識の流れに沿っていると考えられる場合である。

このように、児童の意識と学校や地域の特性を勘案して、児童の目線に寄り添った豊かな単元を構想することが大切である。これは、児童が身近な人々、社会や自然が一体的に構成された環境の中で生活しているからである。また、幼児期から児童期への移行期にいる低学年の児童は、身近にある自然や社会を一体的に認識する発達の段階にあり、具体的な活動や体験を通して、それらに関わる見方・考え方を生かして学ぶために、限られた学習対象を取り出して学習を進めていくことが難しいからである。

こうして複数の内容を組み合わせることにより、一人一人の学習活動に関連性や連続性、発展性が生まれ、児童の思いや願いが一層高まり、思考が深められ、気付きの質が高まるとともに、学びに向かう力等も育まれるものと期待できる。

（第5章 指導計画の作成と学習指導 第3節 単元計画の作成）
文部科学省『解説』、pp.83-84。下線部は引用者による）

ここでは、児童の「学習への意識」が「児童の意識の流れ」、「児童の目線」、「身近にある自然や社会を一体的に認識する発達の段階」、「具体的な活動や体験を通して、それらに関わる見方・考え方を生かして学ぶ」ことへと言い換えられている。『スタートカリキュラムスタートブック』で示された児童期の「自覚的な学び」、つまり、「楽しいことや好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいく」という幼児期の学びに対比しての「学ぶことの意識」とは若干の齟齬があらう。

(2) 集中する時間とそうでない時間の区別

『解説』には、学習活動の時間配分について、「児童の生活リズムや集中する時間、意欲の高まりを大切に、10分から15分程度の短い時間を活用して時間割を構成したり、2時間続きの学習活動を位置付けたりするなどの工夫」（p.61）の記述はあるが、「集中する時間とそうでない時間の区別」についての直接的な言及はない。

(3) 自分の課題の設定

『解説』においては、「意識」と同様に「課題」の語も、例えば、「今日の学校教育が対応すべき課題」といったように「教師側の課題」という意味で用いられることが多い。児童側の課題も、「自然体験の少なさ」、「生活体験の不足から手先の巧緻性」など、計画的に学ぶ際の「学習課題」という意味では捉えがたい。むしろここでは、「生活科は、一人一人の思いや願いを生かす学習を重視する。すなわち具体的な活動や体験を通して感じ、考え、工夫し、問題を解決しながら、自らの思いや願いを実現していく学習過程を大切にしている」（p.75）というときの「問題」の語が、「自覚的な学び」でいう「課題」に近いだろう。しかし、『解説』には、「具体的な活動や体験を通して考え、問題を解決しながら自らの思いや願いを実現していく学習は、総合的な学習の時間にも連続し、発展していく。」（p.80）とあるだけで、どのように課題を設定し、学びに向かわせるのかの具体的な言及はない。

(4) 課題解決への計画的な学び

(3)で、『解説』には、「課題」についての具体的な言及がないことを述べた。そのため当然に、課題解決への「計画」についても言及はない。

以上、『解説』における「自覚的な学び」について検討してきた。実際には、子どもの学びは「無自覚／自覚」と明瞭に割り切れるものではなく、徐々に「わかることの楽しさ」「学ぶことの喜び」に気付いていくものかもしれない。しかし、それを意識して指導していくことが教師の役割であろう。そしてその際、重要な役割を果たすのが「問い」である。次章では、生活科の教科書における「問い」に着目して、生活科における「自覚的な学び」について検討していく。

4. 生活科教科書における「自覚的な学び」

(1) 「自覚的な学び」と「問い」

ここでは、生活科教科書における「問い」に着目し、そこで想定されている「自覚的な学び」について検討する。

なぜ、「問い」に着目するのか。棚橋健治は問いに

ついて、以下のように述べている³⁾。

新学習指導要領では、何ができるようになることが求められているのだろうか。「将来の予測が困難な時代」に生きることになる子供が、予測できない未来に対応するために、「予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合う関わり合う」ことができるようになることである。

それは、「解き方があらかじめ定まった問題を効率的に解く」だけでなく、「蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指す、他者と協同しながら新たな価値を生み出していく」ことである。

(下線部引用者)

ここで棚橋が述べているのは社会科教育に関してであるが、予測できない変化に主体的に向き合うために自ら問いを立ててその解決を目指すことができるようになることは、社会科のみならず学校教育全体で取り組むべき課題であろう。しかし、「問い」は、このような子どもの目指す姿においてのみ重要なわけではない。

小倉勝登は以下のように述べている⁴⁾。

授業改善の第一歩は、教師が「問い」の質を吟味することである。そして、その「問い」は「見方・考え方」つまり追究の視点や方法に基づいた「問い」であることが大切である。(中略：引用者)

「問い」とは、学習問題や毎時間の課題、教師の発問や児童の疑問など幅広く捉えることができ、それは、授業のなかに存在するものであること、何について調べ考えるのか、どのように調べ考えるのか、学習の方向を導くものであること、である。

(下線部引用者)

ここで小倉が述べているのは、学びの結果として育つ子どもの姿として「問いをもてる」ということだけではなく、学びのプロセスのなかで問いをもつことの重要性である。小倉の指摘のように、問いが学習の方向性を導くものであるならば、問いを適切に設定することによって、子どもたちに適切な課題と、課題解決のための見通しをもたせ、計画的な学びにつなげることができるだろう。そして、その学びを振り返ることによって、「学ぶ」ということを意識化させ、自覚的な学びへつなげていくこともできると考える。

それでは、生活科の教科書において、問いはどのように設定されているのだろうか。A社の教科書をもとに検討していく。

(2) 生活科教科書における「問い」

検討材料としてA社の生活科教科書(2011年度用)を使用する。現行学習指導要領に基づく教科書であるが、新学習指導要領にもとづく教科書がつかられていない現在においては、生活科教科書における「問い」を検討する材料として入手可能な最善のものであると

考える。

A社の教科書は、上下2分冊になっており、内容はそれぞれ、以下のようになっている。

【上刊の内容構成】

いちねんせいに なったよ
ぐんぐん のびろ
さあ! みんなで でかけよう
なつが きたよ
ぐんぐん のびろ
げんきに そだて
みんな みんな 大すきだよ
あきって 気もちが いいね
わくわく ゆふが やって
きた
たのしかったね 1年かん

【下刊の内容構成】

レッツゴー! まちたんけん
ぐんぐん のびろ
げんきに そだて
夏が やって きた
ぐんぐん のびろ
あそび 大すき あつまれ!
ぐんぐん のびろ
もっと 知りたいな まちの
こと
まちの すてきを つたえ合
おう
みんな 大すき なったよね

教科書の内容構成から、「ぐんぐん のびろ」、「げんきに そだて」の動植物の飼育・栽培項目が繰り返され、その合間に「なつが きたよ」、「あきって 気もちが いいね」、「わくわく ゆふが やってきた」という季節の変化と生活が挟み込まれていること、身の回りの地域についての学習では、「いちねんせいに なったよ」、「レッツゴー! まちたんけん」、「もっと 知りたいな まちの こと」、「まちの すてきを つたえ合おう」と少しずつ対象を広げ、また、活動内容も変化していることがわかる。

ここでは、児童の社会認識発達の芽を探るという目的から、学校・身の回りの地域についての学習に絞り、教科書に記された問いを検討していく。なお、紙幅の都合上ここでは詳述しないが、生活科を研究教科とする先生による研究授業は、おおむね以下の3点の分析結果と重なることが多い。しかし、現実的には、生活科が低学年だけの教科ということもあり、学校を挙げての研究が進みにくく、低学年を担当することになった先生が教科書をベースに教材研究を行い、授業を実施していることも多い。教科書を分析し、そのエッセンスを抽出して提示することは、このような生活科を専門教科としない先生方の教材研究の負担を軽くすることにつながるだろう。

A社の生活科教科書、学校・身の回りの地域についての学習における問いを次ページの表1にまとめて示す。

表1からわかる、「自覚的な学び」に関する問いの変容について、①問いの質、②学習活動の見通し、③学習活動の選択の3点からそれぞれ述べる。

① 問いの質

上刊の導入単元である「いちねんせいになったよ」は、「学校には何があるのかな」、「何をしているのかな」という問いで始まる。これは、情報を求める「何」

表1 A社の教科書に示された学校・身の回りの地域における学習における「問い」

	教科書に明示された学習活動	キャラクターの台詞に示された学習活動	教科書に明示された問い	キャラクターの台詞に示された問い
一年生になったよ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ おすすめの場所を2年生に教えてもらおう。 ・ 案内してもらったところをみんなに知らせよう。 ・ 次に行ってみたいところを相談しよう。 ・ 学校探検に出発だ。 ・ わくわく ときどきすることを探しに行こう。 ・ 校庭探検に出発だ！ ・ 話をしてほしい3つのこと。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 「どこ」に行ったかな？ ・ 「なに」を見つけたかな？ ・ 「どう」思ったかな？ ・ 私の発見を紹介します。 ・ 話すことの準備をしよう。 ・ みんなに紹介しよう。 私たちは〇〇へ行きました。その場所で〇〇に会いました。〇〇を見つけました。 ・ 学校のまわりをよく見て歩こう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見つけたことをみんなに話そう。 ・ 歌や劇で知らせてもいいね。 ・ カードも見直そう。 ・ 発表したいことを絵に描いてもいいね。 ・ クイズや劇をしてもいいね。 ・ わからないことは質問しよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校には何があるのかな ・ どんな発見があったかな？ ・ 何が見つかるかな？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何をしているのかな。 ・ こんなところは幼稚園や、保育所にあったかな？ ・ 気になったことはあるかな？ ・ どうしてこんなに大きいのかな？ ・ 校長先生はいつも何をしているのですか？ ・ 何をするものかな？
レッツゴー！ まち探検	<ul style="list-style-type: none"> ・ さあ、作戦会議だ！ ・ 行きたいところを、みんなで決めよう。 ・ 準備はいいかな。さあ、出発だ！ ・ まちを探検しよう。 ・ 発見したことを紹介します。 ・ お礼の気持ちを届けよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ どんな人に会えるかな？ ・ おすすめの場所を出し合ってもいいね。 ・ 絵地図にまとめるのもいいね。 ・ みんなにわかりやすく発表してください。 ・ 学校の掲示板でみんなに知らせたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何が見つかるかな？ ・ どんな発見があったかな？ ・ 何が見つかるかな？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何をしているのかな。 ・ こんなところは幼稚園や、保育所にあったかな？ ・ 気になったことはあるかな？ ・ どうしてこんなに大きいのかな？ ・ 校長先生はいつも何をしているのですか？ ・ 何をするものかな？
もつと知りたいな まちのこと	<ul style="list-style-type: none"> ・ また会いに来ました。 ・ 懐かしいこと、新しいこと、たくさん見つけたいな。 ・ カードを並べて、話し合おう。 ・ しっかり計画、準備はいいかな。 ・ 私の「素敵」を紹介したよ。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 今度はどこへ行こうかな。どんな話をしようかな。 ・ みんなが使うあの施設、ここでは何をしているのかな。どんな人たちがいるのかな。 	
まちの素敵を伝え合おう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伝えたいね 私のまちの素敵 ・ みんなで暮らすまちだから、まちの「素敵」を伝え合おうよ。 ・ みんなで一緒に考えよう。 ・ わくわくタウンフェスタ まちの素敵を発表します！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ まちの掲示板に貼らせてもらいたいな。 ・ みんなを呼んでタウンフェスタをしよう！ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ どんな方法で伝え合えるかな？ ・ どう話せば伝わるかな？ 	

(読みやすいよう、ひらがなを適宜漢字にしている)

(what)の問いである。また、「どうしてこんなに大きいのかな?」、「何をするものかな?」という、目に見えるものに対する問いもこの単元の特徴である。

下刊に置かれた「まちたんけん」では、単元スタートの問いは、「どんなところがあるのかな。」となっている。「どんな」(How)の問いは、例えば、大勢の人がいる(視覚から入る情報)と様々な音が聞こえる(聴覚から入る情報)を組み合わせた、朝と夕方のようなすをつなげたりする思考を求める問いであり、「何」(what)の問いよりも高次なものと言えよう。

このようにA社の教科書では、問いの質を変えることで、子どもの思考の質をより高次元なものに導いている。

② 学習活動の見通し

A社の教科書では、学校探検が1回、まち探検が2回計画されている。しかし、問いのかたちで、「今度はどこへ行こうかな。どんな話をしようかな」という学びの見通しが問われるのは、まち探検の2回目が初めてである。ここでは、1回目のまち探検のときの作成したカードを並べ直し、探検の計画を立てることが求められている。「どこで、だれに、どんな話を聞く」という探検の計画をつくる問いであるが、この問いに答えるための材料は、すでに子どもたちによって、1回目のまち探検のときに作られている。探検の計画をつくるという学習活動の見通しがもてるよう、十分な準備ができていると言えよう。

③ 学習活動の選択

上述したように、A社の教科書では、学校探検が1回、まち探検が2回行われる。1回目の学校探検のときから、発表方法に関して、絵、クイズ、劇など多様な学習活動が提案されている。しかし、「どんな方法で伝え合えるかな?」、「どう話せば伝わるかな?」という学習活動の選択は、2回目のまち探検になって初めて問われる。「どんな方法で、どう話せば」伝わるかという学習活動の選択のためには、相手意識はもちろん、多様な学習活動を経験し、その良さについて自覚的である必要がある。それが、この問いが探検と発表による振り返りを繰り返したあとに置かれている理由であろう。

(3) 生活科教科書における「問い」からみる自覚的な学び

前節で検討した通り、児童に提示する問いの質を高めながら学習計画を立てたり、学習活動の選択ができるよう、2年間の生活科の学習が構成されていた。これを「自覚的な学び」の観点から述べるならば、次のことが言えよう。

① 「問いをもつ→活動する→発見を紹介する」とい

う学習のサイクル

幼児期の学びが言葉や非言語によるコミュニケーションから生まれるものであるならば、小学校教育での学びは話したり聞いたりなどの言葉によるコミュニケーションから生まれるものである。

A社の教科書では、導入単元で「学校には何があるかな」、「何をしているのかな」という人・ものに関わる問いをもち、探検で得た発見を紹介する。この一連の流れを通して「何を学んだか」を自覚することが、学ぶということへの意識を育てるスタートであると言えよう。

② 「自分の課題をもつ」ための情報の共有

A社の教科書では、3回の探検でそれぞれ「行ってみたいところ」を児童が決定することになっている。これが、他のだれかとは違う自分の課題をもつことにつながるわけだが、それを可能にしているのは、「おすすめの場所を2年生に教えてもらう」、「おすすめの場所を出し合う」という情報共有の活動である。

情報共有によって児童は、多様でありうる課題の中から自己の課題を選択・決定することになる。これが学習課題を自分のものとして設定することにつながる言えよう。

③ 2年間を見通した学習活動の計画

A社の教科書では、探検の計画や見つけたことを伝える方法についての自覚的な検討、つまり、課題解決への計画的な学びは2回目のまち探検で初めて明示的に行われる。しかし、これは突然できるようになるわけではない。最初の学校探検のときからの様々な活動経験の蓄積によるものである。

生活科の2年間の学びを見通した学習計画によって、子どもの課題解決への計画的な学びが可能になると言えよう。

5. おわりに

本稿では、指導要領や教科書の分析を通して、生活科に期待されている小学校教育におけるスタートカリキュラムという役割を十分に果たすための課題について検討してきた。その結果、「自覚的な学び」を実現するための手立てとして、①「問いをもつ→活動する→発見を紹介する」という学習のサイクル、②「自分の課題をもつ」ための情報の共有、③2年間を見通した学習活動の計画、の3点が明らかとなった。

今後は、実際の実践事例の検討を通して、子どもたちの自覚的な学びのありようとそのための教師の手だてについて検討していきたい。

【注】

1) 成田頼昭・山田ゆかり・若林一哉・上野秀人「幼児期の教育と小学校教育を繋ぐカリキュラムに関する考察」『弘前

大学教育学部紀要』第115号（第2分冊）、2016、pp.41-53

- 2) 成田ら、前掲
- 3) 棚橋健治「育成を目指す資質・能力の三つの柱—知識の構造化の視点から社会科で求められる取組とは—知識・技能：事象を捉える視点・問いを引き出す構造化」『社会科教育PLUS 平成二九年版 学習指導 要領改訂のポイント 小学校・中学校 社会』明治図書、2017
- 4) 小倉勝登「【授業改善の視点③】「内容の取扱い等」に関する解説「社会的な見方・考え方」を働かせる 指導のポイント」『平成29年度 小学校 新学習指導要領総整

理 社会』東洋館出版社、2017

【参考文献】

- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』、2017
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』、2017
- ・文部科学省 国立教育政策研究所『スタートカリキュラムスタートブック』、2015
- ・啓林館『わくわく せいかつ上』、『いきいき せいかつ 下』、2011 表1 A社の教科書に示された学校・身の回りの地域における学習における「問い」